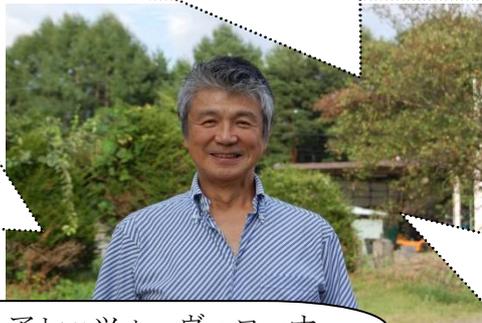


# 大熊一夫氏講演会

## 精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本

1970年、私は偶然の機会から、精神病院の鉄格子の内側の世界を知った。朝日新聞に「ルポ・精神病棟」を連載した。そこは生き地獄だった。この地獄はどうしたら解消できるのだろうか、と考えた。

しかし、私には、精神病院のない社会なんて思いもよらなかった。だから、その後、病棟内の幸せにばかり心惹かれて、開放型精神病院詣でを繰り返した。



「ルポ・精神病棟」から15年経った時、イタリアにマニコミオ（精神病院）をなくす法律ができていたことを知った。イタリアは20世紀の終わりまでに、全てのマニコミオを閉じた。マニコミオの代わりに、全土に公的地域精神保健サービス網を敷いた。

そして今、トリエステ、アレツォ、ヴェローナ、フェッラーラ、マントヴァ、トゥレント…など多くのまちが、精神病院を使わずとも重い統合失調症の人々を支え得ることを証明している。

元朝日新聞記者、元大阪大学院教授「精神病院を捨てたイタリア捨てない日本」「ルポ精神病棟」他著書多数

2013年 **9月16日**（月・祝） 開演 **13:50**

会場：浦和コミュニティセンター 第15集会室（開場13:20）  
（浦和駅東口駅前 浦和パルコ9階）

資料代：500円 要予約

戦後、多くの先進国で、脱病院化・地域化を目指す精神保健改革が始まった。精神科病床は急激に減り、それに代わって、精神病の人々が在宅で暮らすための社会資源が増えた。だが、日本だけは、精神科ベッドを増やし続けて今も高止まりのまま。そして、病棟に代わるべき在宅生活の支えは極めて不十分である。

先覚者たちの献身的な実践は、昔も今もある。日本にも精神医療改革が叫ばれた時代はあった。だがその声も、「地域で普通に暮らすシステム」への大転換がなされぬまま消えていった。

日本の精神保健改革の行く手をさえぎるのは、「私立精神病院依存主義」という世界に類のない壁である。

イタリアと日本。その好対照な二国の現実をルポし、日本の精神保健のあるべき姿を提言する。

主催 埼玉県精神医療を考える会

後援 埼玉県精神障害者地域生活支援協議会、精神医療国家賠償請求訴訟の会

申込み・問合せ [hoshiok@gmail.com](mailto:hoshiok@gmail.com) fax048-731-3401（星丘）

\*この講演会はネット配信を予定しています。（電波の状態により後日の配信になることがあります）